

31

古びた目覚まし時計

父は寢室に、古びた目覚まし時計をいつも大事そうに置いています。「僕」が理由を尋ねると、父は、中学生時代の思い出を話してくれました。

小学校を卒業するまで毎朝母親に起こしてもらっていた父は、中学校入学を機に新しい目覚まし時計をもらい、これからは一人で起きることを約束します。寝坊してしまうこともありましたが、誰も起こしてくれません。そこで父はある決心をします。



中学生時代の父（昭夫）

